

自由われらの園 国府高校100周年

国府高校(豊川市)は二〇二〇年度から「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)を推進する県教委の研究主管校だ。各教科とも教員が一方的に教え込むのではなく、生徒たちがグループワークや議論を通じて、自ら学びを深めていくスタイルの授業が始まっている。

十一月中旬、普通科一年生の「数学I」の授業では、円に内接する四角形の二つの対角線が作る線分比を求めようと、生徒たちが四入ずつのグループに分かれて話し合いを進めていた。「答えが合うかは気にせず、いろんなアイデアを出

し合っていると水崎拓也教諭(二)は、生徒たちは、与えられた条件やこれまでに習った公式、定理などを駆使して解き方を模索する。三グループがそれぞれ異なる方法を発表し、最後に水崎教諭がスクリーンに映し出した図形を使って解説を加えた。

大嶋貫太さん(二)は「ほかのひとと問題を解くプロセスを共有することで思考力が高まる。ただ、教科書に沿って進められる授業より、自分たちで学んでいく良さがある」と歓迎した。今後は授業研究のほか、視聴覚室をグループ学習しやすい「アクティブ・ラー

ニングルーム」として改修し、生徒たちの学びを支えていく計画。卒業生でもある伊与田万知校長(五)は「本校の校訓にも通じる試み。グローバル社会の中、多様な考えや価値観を持つ人々と共に、未知なる課題の解決に果敢に挑む生徒を育てていきたい」と話す。

国府高では創立八十周年を記念し、新たな校訓として「学術 為当為(学ぶ術を学び、当に為すべきを為す)」を制定している。考案したのは、卒業生で元同校校長の大河原皓視さん(五)＝豊田市栄町。「校歌にもある国府伝統の『自由』は、勝手気ままや放任



グループで話し合いながら、さまざまな解き方を探る生徒たち＝豊川市の国府高で

ではなく、未来に向けて現在を拘束するものに挑み、解き放つていく姿勢そのもの」と説明した上で、「単に知識の習得にとどまらず『どう学ぶのか』を大切に、社会のさまざまな場面で自分の使命や役割を果たして欲しい」と校訓に込めた思いを語る。

宝飯郡高等女学校が国府の地に誕生して一世紀。まもなく国府高にとって次の百年への幕が開ける。

昨年度前期の生徒会長を務めた三年の新美晴菜さん(二)は、創立百周年に向けた生徒会プロジェクトを通じて同校の歩みに触れてきた。「太平洋戦争中の悲惨な経験を乗り越え、歴史をつないできたからこそ今がある。百年はゴールではない。一人一人が『当に為すべきを為す』を大切に、さらに良い学校にしてほしい」

(この連載は川合道子が担当しました。次は卒業生インタビュー編です)

現代編③ 主体的な学び

困難に挑む力はぐくむ